

## 2018 年 10 月 7 日（日）「イエスの杯」

マタイ 20:17-28（その 1）

17 さて、イエスは、エルサレムに上ろうとしておられたが、十二弟子だけを呼んで、道々彼らに話された。18 「さあ、これから、わたしたちはエルサレムに向かって行きます。人の子は、祭司長、律法学者たちに引き渡されるのです。彼らは人の子を死刑に定めます。19 そして、あざけり、むち打ち、十字架につけるため、異邦人に引き渡します。しかし、人の子は三日目によみがえります。」

20 そのとき、ゼベダイの子たちの母が、子どもたちといっしょにイエスのもとに来て、ひれ伏して、お願いがありますと言った。21 イエスが彼女に、「どんな願いですか」と言われると、彼女は言った。「私のこのふたりの息子が、あなたの御国で、ひとりあなたの右に、ひとりは左にすわれるようにおことばを下さい。」22 けれども、イエスは答えて言われた。「あなたがたは自分が何を求めているのか、わかっていないのです。わたしが飲もうとしている杯を飲むことができますか。」彼らは「できます」と言った。23 イエスは言われた。「あなたがたはわたしの杯を飲みはします。しかし、わたしの右と左にすわることは、このわたしの許すことではなく、わたしの父によってそれに備えられた人々があるのです。」24 このことを聞いたほかの十人は、このふたりの兄弟のことで腹を立てた。

25 そこで、イエスは彼らを呼び寄せて、言われた。「あなたがたも知っているとおり、異邦人の支配者たちは彼らを支配し、偉い人たちは彼らの上に権力をふるいます。26 あなたがたの間では、そうではありません。あなたがたの間で偉くなりたいと思う者は、みなに仕える者になりなさい。27 あなたがたの間で人の先に立ちたいと思う者は、あなたがたのしもべになりなさい。28 人の子が来たのが、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためであるのと同じです。」

### 【序論】

教会では時に「自立したクリスチャンになる」という言い方をすることがあります。「成熟したクリスチャンになる」と言い換えてもよいでしょう。これは、信仰面において誰かに頼りっぱなしの状態を卒業し、自ら献身の道を選び取るようになることです。主イエスの十字架を、嫌々ながらでなく、自らの意志で負っていく。地上の教会の目指すところは、そのようなクリスチャンを多く生み出すことではないでしょうか。極端な言い方をしますが、たとえ牧師に何かがあったとしても、崩れてしまうことのない、底力のある教会を形成していくこと、これが牧会者の使命だと認識しています。

## 【本論】

今日の箇所の中には、印象深い記事が出てきます。十二弟子の中の二人、ゼベダイの子ら（ヤコブ・ヨハネ兄弟）が、何と母親同伴で主イエスの許にやって来て、神の国での最高の位を願い求めるといふものです。何とも醜悪な、恥さらしのような記録が聖書には残されている。ヤコブもヨハネもこんな記事が福音書に載せられ、世の終わりまで語り継がれるとは思ってもみなかったことでしょう。しかし、彼らのこの行動は当時のユダヤ人の考え方を特徴的に描いており、主イエスの教えが如何に時代を逆行するものであったかが分かります。

### 本論 1. 受難予告の極み

さて、イエスは、エルサレムに上ろうとしておられたが、十二弟子だけを呼んで、道々彼らに話された。（20:17）

過越の祭が間近に迫り、一行はそれに合わせて上京しようとしていました。この巡礼は、ユダヤ人にとって喜びと祝いの時であり、神の民としてのアイデンティティを強く意識する時でもありました。弟子たちも内心何かが起こることを予感していたはずですが。この時に主イエスと一緒にいたのは、恐らく十二弟子だけではなく、男女が入り混じった多くの弟子団でありましょう。しかし、主はそこで密かに側近を呼び寄せ、これから起きようとしていることをお話しになりました。

「さあ、これから、わたしたちはエルサレムに向かって行きます。人の子は、祭司長、律法学者たちに引き渡されるのです。彼らは人の子を死刑に定めます。そして、あざけり、むち打ち、十字架につけるため、異邦人に引き渡します。しかし、人の子は三日目によみがえります。」（20:18-19）

これが何度目の受難予告であると言えるか、明確なのは 16:21、17:22-23 ですから、三度目と言ってもよい。しかし、17:12 にもバプテスマのヨハネの死の文脈で、ご自身の受難について触れられているので、四度目と言えるかも知れません。いずれにしても、今回の受難予告はこれまでも増して内容が具体的です。まず、「祭司長、律法学者たちに引き渡される」と言われています。これはユダヤ教最高議会（サンヘドリン）を表す表現でしょう。ユダヤ教指導者らの敵意が極まる。また、処刑の方法として「十字架」が明示されます。当時、十字架刑はローマ帝国によって行なわれていた、これ以上に残酷な刑罰はないと言える、極刑中の極刑です。ユダヤ人による石打、火刑、絞首刑ではありません。ローマ人の手による処刑が既に主イエスの念頭にはあるのです。で

すから、もう一つの追加点として「異邦人に引き渡します」という表現が出てきますが、これは実質的にはローマ人のことが言われている。このことは何を意味するかというと、主イエスはユダヤ人から捨てられ、もはや神の民の一人として数えられることもなく、殺されるということなのです。サンヘドリンは、「ナザレのイエスはキリストではなかった」「この男は自らを神の子としたが、イスラエルに繁栄をもたらすことはできなかった」「偽りのキリストである」との判決を下し、完全に遺棄するのです。それが、「異邦人に引き渡す」という事柄の意味です。

ところが、この一見サンヘドリンの勝利に見える裁判と、ローマ人による処刑は、主の復活によってひっくり返されてしまう。主は「三日目によみがえります」という言葉を加え、ご自身の最終的な勝利を約束されます。ここでは実際には受動態の動詞が使われていますので、「甦らされる」というニュアンスで捉えた方がよいでしょう。主イエスは死によって全くの無力な状態になられる。神の子がそこまで低く降られる。ご自分の命の全権を父なる神様にお委ねになるのです。異邦人に引き渡されるという最大の侮辱さえ、甘んじてお受けになる。その結果、救済史は何と異邦人全体に救いが及ぶという展開になっていきます。神は人の罪（神のひとり子を殺すというそれ以上が存在しない罪）さえもお用いになって、多くの人を贖う計画を推進されるのです。そして、主イエスご自身もその父なる神様のご計画を知った上で、従い抜こうとしておられる。

## 本論 2. ゼベダイ家の誤解

そのとき、ゼベダイの子たちの母が、子どもたちといっしょにイエスのもとに来て、ひれ伏して、お願いがありますと言った。（20:20）

「ゼベダイの子たち」とは、元漁師であったヤコブとヨハネの兄弟のことです。彼らはペテロと共に主イエスの最側近として、たびたび重要な局面で連れて行かれました。そのこともあるのでしょう。特にヨハネはペテロに対する強いライバル意識を持っていたようです。ヨハネ福音書では、いちいち「ふたりはいっしょに走ったが、もうひとりの弟子がペテロよりも速かったので、先に墓に着いた」（ヨハネ 20:4）などということが書かれています。そして、ヨハネは自分の福音書の中で繰り返し「主が愛された弟子」と自らを語る。ヨハネにしてもヤコブにしても、他の弟子たちも、先にペテロが主イエスから直接「わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てます」（マタイ 16:18）と別格の扱いをされたことに、一抹の不安を抱いていたと思われます。ペテロがいつの間にか弟子団を治める立場に立っている。俺たちもこうしちゃいられないと、焦りを覚えていたのです。このような心理が、20 節以下の行動へと彼らを駆り立てたのでしょう。

「ゼベダイの子たちの母」という人物は、さりげなく登場しますが、実はかなり興味深い立場にあります。彼女はどうも、主イエスの母マリヤと血のつながった姉妹であったようなのです。そのことが分かる十字架の場面を見てみましょう。

- ・ その中に、マグダラのマリヤ、ヤコブとヨセフとの母マリヤ、ゼベダイの子らの母がいた。

(27:56)

- ・ 兵士たちはこのようなことをしたが、イエスの十字架のそばには、イエスの母と母の姉妹と、クロパの妻のマリヤとマグダラのマリヤが立っていた。(ヨハネ19:25)
- ・ また、遠くのほうから見ていた女たちもいた。その中にマグダラのマリヤと、小ヤコブとヨセの母マリヤと、またサロメもいた。(マルコ15:40)

やや情報が入り組んでいますが、「ゼベダイの子らの母」「(イエスの) 母の姉妹」「サロメ」は同一人物と思われます。もしそうだとしますと、ここでの嘆願は「身内贖身」を求めるものということになる。主イエスとヤコブ・ヨハネ兄弟は、血縁的には従兄弟ということになるか！他の弟子たちとは関係の近さが違う。そこで、特別扱いを求めるのは、分からない話でもありません。ヤコブ・ヨハネ兄弟は、母親と結託し、あらかじめ相談をして、主の許にやってきたのです。

イエスが彼女に、「どんな願いですか」と言われると、彼女は言った。「私のこのふたりの息子が、あなたの御国で、ひとりはおあなたの右に、ひとは左にすわれるようにおことを下さい。」(20:21)

平身低頭、地に頭を付け、恥も外聞もかなぐり捨てて、我が子のために嘆願した。甥に対して頭を下げたということになります。彼女の中では、今という時を逃してはいけないとの思いがあったのでしょう。息子たちの一生がかかった大局面と思われたのです。彼女の姿勢は決して美しいものではありませんが、一面時を見抜く目は鋭いと言えましょう。主イエスがいよいよエルサレムへ向かい、王として即位しようとしておられることを悟っているのです。結果、主イエスは王になるどころか、鞭打たれ、十字架に架けられ、抹殺されることになるのですが、この出来事の裏側には確かに神の国の王としての即位が隠されています。十字架に上げられる主イエスは、まさにその瞬間が最も低き者となられた神の国の王の即位式なのです。主イエスの右と左に座することは、右大臣、左大臣の地位を得るということでしょう。彼女が願い求めていることは、イスラエルに偉大な繁栄をもたらすイエスの最側近として息子たちが立てられることでした。しかし、彼女は主イエスの栄光の真の意味を理解していなかった。これまでの主の教え、神の国の福音とはかけ離れた、あくまでもイスラエルの繁栄を取り戻す王、ローマ帝国を打ち破る支配者として、主が立たれることを願っていたのです。

### 本論 3. 罪人に仕える王

いかがでしょう。これとレベルは違いますが、私たちがキリスト教信仰を持っている理由が、もし自分自身の繁栄や自己実現のためだったとすれば、このゼベダイ家の人々と同様の考えがそこに潜んでいることにはならないでしょうか。主の共同体が名誉欲とか支配欲によって覆われていくなれば、それはもはや神の民の姿ではありません。

けれども、イエスは答えて言われた。「あなたがたは自分が何を求めているのか、わかっていないのです。わたしが飲もうとしている杯を飲むことができますか。」彼らは「できます」と言った。(20:22)

「杯」という言葉が使われていますが、主イエスは旧約的なイメージをもって語っておられるでしょう。

- ・ さめよ。さめよ。立ち上がれ。エルサレム。あなたは、主の手から、憤りの杯を飲み、よめかす大杯を飲み干した。(イザヤ 51:17)
- ・ そこで、私は主の御手からその杯を取り、主が私を遣わされたすべての国々に飲ませた。(エレミヤ 25:17)

旧約預言書で「杯」という表現が出てくるとき、多くの場合、神の怒りと関係があります。人の罪に対する神の審きというイメージがある。主イエスはご自分が飲もうとしている杯、即ち十字架を、神の怒りを一身に引き受けることとして語っておられるのです。罪人に仕える王として、その命を捨てることであります。次回扱う箇所となりますが、28 節には福音の真髄、主イエスが世に来られた目的が描かれている。

人の子が来たのが、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためであるのと同じです。

主イエスが弟子たちに求めておられるのは、この主の道を共に歩むこと。自分自身を神にささげ尽くし、すべての人のしもべとなって命を捨てることです。その意味で、「わたしが飲もうとしている杯を飲むことができますか」という問いは重い。ヤコブとヨハネは何も分からずに「できます」と返答する。現時点での彼らの理解、人間的気概によっては決して全うできるものではありません。彼らは十字架の場面で主を捨てて逃げ出してしまうのです。ところが、そのような未熟な発言をも主は受け入れてくださいました。

イエスは言われた。「あなたがたはわたしの杯を飲みはします。しかし、わたしの右と左にすわることは、このわたしの許すことではなく、わたしの父によってそれに備えられた人々があるのです。」(20:23)

人は自分の語ったことに責任を持たなければなりません。ヤコブとヨハネの「できます」という言葉は、ある意味において、将来実現していくものとなるのです。ヤコブは殉教

の死を遂げ（使徒 12:2）、ヨハネは晩年にパトモス島に島流しに遭い、生きながらの殉教を遂げていきます（黙示録 1:9）。エウセビオスの『教会史』という書物には、ヨハネがエペソでの牧会活動の後、殉教したということが書かれているそうです（3 巻 23:4-6、5 巻 24:3）。

主イエスの「右と左」に座るということが何を意味しているのかはやや不明瞭ではありますが、主は確かにそのような立場に置かれる人がいることを語っています。それが神の国の完成の時のことなのか、あるいは十字架で栄光を受ける場面であるのかは分かりません。仮に後者のことが言われているとしますと、「**そのとき、イエスといっしょに、ふたりの強盗が、ひとり右に、ひとり左に、十字架につけられた**」（27:38）という言葉は意味深長に読者の耳に響いてきます。この二人が主の横に並べられたことは、主がまことに「罪人の救い主」「罪人に仕える王」として命を捨て給うたことを表しているでしょう。

## 【結論】

主イエスの御足の跡に従うということは、すべての人のしもべとなられた主と同じようになることを意味します。私たちの生き方は果たしてそのようなものであるだろうか。この共同体は、そのような生き方を志す人々によって、相互に仕え合っているだろうか。主の十字架を負うということは、実際に殉教することだけを指すではありません。

「弟子は師と同じく苦難の道、十字架の道を歩まねばならない。ただし、この十字架の道は、悲壮、凄絶な殉教にとどまらない。十字架の道の実際有様は、通常の生活——教会生活、家庭生活そして社会生活に現れてくる。平常、つまり常日頃の謙虚な生き方、交わりの中に表れるのであります。生き方という広い意味の道徳的なあり方にこそ、十字架の道はある！」（奥村修武、マルコ福音書講解説教《下巻》p. 110）

まず、最も身近なところから人に仕える生き方を志したいと思います。しかし、それは聖霊に導かれることなしに実現できるものではありません。自らの力でやろうとするのではなく、祈りの中で、今自分が何をすべきであるのかを教えられながら、力を受けて、歩んでいきたいと思います。

## 【祈り】

一人一人に信仰的自立を求め給う、天の父なる神様。あなたが求め給う道は、私たちの自己実現ではなく、如何に仕えるかであります。主イエスは十字架に挙げられ、神の国の王として即位されました。そこには、すべての栄光をかなぐり捨てた神の子の姿がありました。私たちにそのような道を辿ることができるでしょうか。ひと足ひと足、主イエスに近い者へと造り変えてください。私たちの人生が偽りなき献身の道となることができますように。

## 【祝祷】

仰ぎ願わくは、  
御子イエスを神の国の王として世に遣わし、十字架上で栄光を与え給うた、父なる神の愛。  
罪人の救い主として命を投げ出し、ご自身の命運の全権を父なる神に預け給うた、主イエス・キリストの恵み。  
この世の栄光や自己実現ではなく、ただ仕えることに最上の喜びを見出させ給う、聖霊の親しき交わりが、  
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。